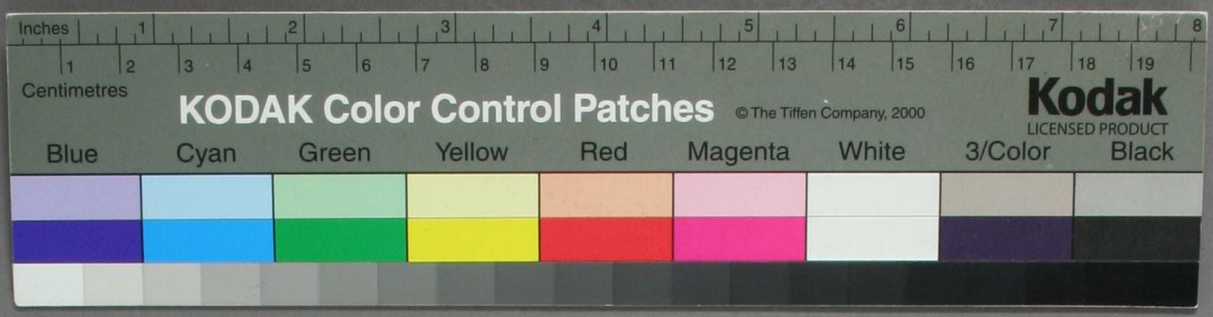

小嶋農洲佐美

歌體約言　西行人談抄
女官志　大嘗會畧記
悦目抄（拔）　徹書記物語

1曾4
775
265

集

小嶋のすさみ

方體約言

西行上人談抄

女官志

元文三年大嘗會略記

悦目抄

摸書

中村直道家藏

曾
775
265

徽書記抄治　早

按書

小嶋のすさひ序例

大正二年一月卅一日寄
中村楢雄氏贈

此書は二條関白太政大臣藤原良基公の御筆なり良基公は大織冠より五世の嫡流後光明照院摂政道平公の御子なり天性和漢の才に達し弁舌利根人にすぐれ給ひて秀歌おほく世にしられ時　天子両統にわかれて南北にましまし両主後醍醐天皇吉野へ行幸以後南方には北畠准后源親房卿南帝を補佐して政事沙汰あつかり行はれ北朝には良基公摂関に任し光厳院より志めし三代の天子につかへ給ひて天下廿一の重任として政務をとりたまひ殊に延元弘年中より打続き世の乱れ文よとゞやかなりしを尊氏卿世をおさめてより武人四海をまもる

どくらへむとも南朝の官軍諸国の忠臣時々蜂起
せし事なし是皆尊氏将軍父子東西下向の留
守をうかゝひ件の友軍京都を襲ひ見て東都よりも
に依く小帝九重におしへらるゝ百夜をたてゝへ
給ひく濃州小嶋に遷幸ましゝ御良基公も同
しく供奉してさまよひ旅行の記録をつけ文とえらひしく
小嶋の名にしたるつきを号すさみとは何となくはかなき
たまふなまく綴さいへども是なきさまや軍兵
軍下のおもむき筆史とも紀せのうちにさきゝと
思ひやられ此記を読まば感情深かるべしこれは
まさ文は流麗まなぐれりよしいひつくし侍らば
今ま一字をたがへず仮名付を用ひて此書のまく
ところしく梓にちりばむ事をのぞむし此良基
公の事跡委しく国史略 太平記を分 歴代の史
未載を待せは家に略しせりんぬ

小鴻のたきうん　上

小倉山の麓中院の草れハ為家卿のかくれかのかたみを
のこしたりしはらハやゝふさへうつちひくいと
前乃いろちとけ出泥たれんちして梅よ添日於
ゑらしかはよ添はよましなひかしさ海大
小とこなとかくしひくさるへきぬんたくりかちなや
せら小ゝなとれにゐしほ宗ふ志くあしぬり
ふ添ねとひ座りて捨なりりし開の東より
あきらりぬ風よたせく吹くはりなさけかさ
せよ何のよのしみちえしと座すしぬと為ひく
あつしらハ宮ふ宮凋乃中そとのらふましけ
るらせのあり柿ふわりくいたしくゐ松風のとけ
しさとうことへしぬ山添也ゝのうたきなし

ねハ七月すゑあまりなぬかの月まさに秋なかばなれは
此處と立出てはつ雨ちとせかけりひとむらのうち
ちて流し物かなしされいうと詠男ま間のかまく
おきかの事と俗なすれはなきと歌山乃んさしなきハ
なふくら神仏と爲すさ給ひさしんと於かとひなく
さめしさよひハまつ暮なむにつきぬ山法師ハらひく
しれものわく事のほかにまちよろこぬ弟のむし
ろの寄かけしひくちよひ乃を陽しハさの坊にかち
けいめハせしらハろ乃秋ハらく高ありしぬみの月と
おこり月にくいそうしみならめくしすあく誰船
みさしおしくむら人乃こしに法くさのそうりハ
ろ御とかりしらに小舟乃くろしくとするやう
ならふのろとくるんらいとむく法せししらふ於らし
してとゐ山に法さめる名ハとうししりれにさ
しく見不かしら乃要之ら村爲といらくとひ
りろハ出のろうりみやしぬるすそまつ歌りひおしれし

とろ山持下葉ハいましえほらく
うれに志く誰ら神ら寄るさ

おくちろひしく歌りひ法くくろまくとかしらく
て渕ふとふ那渕志のけしなに京あるもハ許枕
にくるてなれしうと陽しにハりふそるけそめ
他りし

寄けさハ給わりひとくらん人とらか
那らちの志れりし思ふるやこふ

又かくえといぬ心とすく立よりくみまくほしけり
しかもゆくされと代く　いそにしかはにはゆき
婦りゐくそぬ
　はるくと行末とほくかゝる山
　　うけくくとしぬる代そ志つるく
人志まぬ心のゝちのあし御しとおもと婦るめくいと
物侘しさゆやおいそれ萩やそ云ふい在く松乃こす
忘かりふてあし悠木をたしふますら心とせ
うきて流の末いと見ゆ多しをこ志とく行嵩ぬましい
おしかれすへくして我一夜の第れとへいたくふかい
里よ小河小手しける尾ひとりわかく心のあり
のさいかく行つちせありしかことのらりれきしさ

心そいとなさけぬらくみて侍き名とはなふにとかにか
と我よしうしこれあまのいふやし　さまとなんふかき
名ぶに侍りきる尾ら手れ名ふかく侍るよしとそたゞ
よくしかくれその中にちんあるかしひさしふ
いからひかりとも月さて　いとあはれにかく
　いますふ心の花香ぬ春そよおもふらしぬ
　こそらあまりとすさの下かけ
こゝりおちたる浅むつうし家れい一萩あさくゆり
使ま国けりわくあらしたのゆくされする
くとゝあしく日数のゝつとつけゝ又風そ川と
うやとふかゝるとて
　いたまてし袖ちぬらしやかすかの

風きをあはれせとゆるさらめん

いぬかみやとこの山いさや川なといふ所をもゆくめ
ふかゝるとかなれハ津くやさとれたるひとよれさ
しれとゝかある所ハあるまかしかはしと示へ淡振の
かくすれさしらんとうるさくて色わりしひかの
柳と淡へハ筆よのちはくとうさなとしくなやと
こゝ乃山人よくちゝさめまねしく花紡る伊吹の嶽と
なや八雲井乃よりかゝちゝくし葉とゆくや
小松原よさるゝ小野とやいぬ不ふく三宝院
僧正よ勅使とはのかくへ急津あつて御ゆゝし
やしろハとるもいはる小宮乃かゝくいつゝかしらね
すへて多かそ示ほらくひよひかり乃長谷のかと
ろへ津乃ほゝふれとゝさせる家しきかりやゝらく
殿のさく色ぬ出来のかゝし名ハ姉る沢みなしかと
おほく結もとおもちらの見こ乃すゝみかゝるハ
おりひやるとものほささくち花せしゝくて幼
ゐかゝみ松の陰花んさゆ宮様よりまれいたるみ
のなられいかさゝのあすまて母てふせよ立てぬ示
とえ世あつたこさめか井なるしやらくみゆけ橋あ
つゝくちいされ多しきよもそるふされと宮よ
りわかみまちくひなしひさこといぬやのめおて
ほあしひかしてすくいふめくしれみかり

今よりやらりし岩ともあか井の
みのかられく末をしのまん

不破の関屋はむかしにあれにけれどそのやうなる
板ひさし竹乃あみ戸ばかりぞのこり宿るに秋風も
せきもる雨しらえてしるや

むかしにあれにし不破の関守は
今はさかえんのこそありけり

実の藤川はその名をもとめし家れはされてたゞと
いはしるはもしられとはしとなれぬ小川とて
よろつ代まくれなくされともすされとまて
きぬるあしいとものにしくく

ゆくと杉つまね名にやとゞめまし
美しかふちとの関乃藤川

みのとなやましかやはてや佐小沼のあらりちくゝ哉し

かくかさねとえはわれとあらしとくれふそちかふちら
とおちね侍りし名なしれ一松なり代々のまゝま
こなたの跡からぬよしなのあかりの志と今のうり
し哉よくと聞きさりして後の世までくるしかりし

こかまた名さへのこおふ乃まつもと
かふくひたれ世のそめしかな

つゞいて二三日のたてを六日の杉やすくかくして
もしゆふまいつらつきぬるとあしくぬ不のうしさ
左も右もうひえてる山ゝ雲いと晴るくまてまく
さし小晴るなし実まさかり念なるものに
かぬ不なりけりはしと秋乃深山のあやさ海あまと
しこめていひなしぬとの気いはんくさなし謙の

音宗のゑるとらの松陰にく咲し秋ハその枝なしれ
相見しいまゝ成りしの何りひかしにやとしすく山
なしとていとなくさめ侍ぬへき梅の宮とあま
りふよわたちをとりしかりしハ二條中納言の立
よせし給ふへきちつきぬ大宮のみや御なやら新瑞
竹のあらた御りしすゝすのこより風とう御しきの吹
あけく一夜のたるとやとりらしはま一日と少々い
そ侍くゝふそやうく小鳥の聲つまりしゆさく
うさくれてかへしの袖といとゝ忘れもはてぬ裾
うけ乃めつらしきみや山人めくと乃かはくえ侍し
内裏のみゆ御ハおのあまり小ハまれなる梅ちされと
山ハさかりし新瑞みそ雲居のこれ御かしやうく
ほおのめしあいておのやゝの世れたさなし参す山よ
りのほとちのとりかりし年なしとさ御しく哀なる
るすたそ作とてきしと秋ハ瑞岩るいろやいふる君
知く少く御りけ嵯いと見不多し山陰にぬうく作りな
して岩床乃の流と成りてとおいれ不い知りしかせ
ぬへき山も少く侍なりみの日の佐日一日限くくれ
ふかくしくゝうの秋いあけぬ梅花のんかそさ
いふき風りて桜そすれかり

いやしく御ゝしよれみつきそ嫣梅なるか
うれむつちの花れまさりし

附え納言のさふし御不成あけく化すえへ初そ鄕し
ふ八二三日あ切らくそうちすきの山ゝ御よ本そし

賢俊僧正はく世のあらさ何かはさほゝはく参し
く八幡宮へまうりぬかつくは床をなしてしたゝめ
さしふりけり御神にも御けしき
三くさるかたなしいね山のかげ何くと
ゆらとなしへん歌ことあらは
神代とりける歌をこゝろにかけたるといひおこ
何しくやそれは哥をよまむとするに御哥のむら
しはせるなし後京極の殿の御歌をさよし
新古今集にもえらばれて今にいたるまで
られなやけさしきなかし八月有るの
うち小類をとりてよみて
慈天家

松とりけは悲ゆく山のすゑふのこゑとや
月残るこしふちこゑをとなりん

旅曙

よこ雲は高くなる峯をわかくと
風さえわたしゆのかきそあけ行

此歌をとけはめくれさくまうりしるよしへらね
しやすさすくおかりしうとしる古ねよ尚そ
のりさつまはいやくこくいかしくみかとし
つ比判なとは年まうとおもひよりえかた
とうゝまとなく世人は中くにうとさ前
御ん為かしてさしふくをふ（きこ）八月十日はかりつ
の日ふくありしやらん御為ふさまたとくぬら

ささみちのはふくまとうすゐのこすやうしむすひたまへら
まく仲房釣たまへくさされ給りし
何となくぬるふくまし小夜さらく
さくれともまくぬ秋紫をそへる

返し
婦りき心ふかくかゝゆきの杉しや
秋紫のかしさうつゝいそくらん

八月十日あまり八日秋のゝ婦る雨の中いとわてたね
雲井ハ山ふられんちしく物むたらしわくさかから
露霜よりうちまてく紫の松風ゆし雨しく吹かつ
しよみつ小すさ雨しるし半のくたぬ保さかくね
西と百ぬとしのくたうとあらさしれ字のさめし
なれとむりし木の九霞なしいひろうとかくさそハあつか深め
此處の法家のふあしゝと元正天皇さかとしふひくあと
氏字なましおもろく八さすし添しなしハぬ山の
法すゐねすく世法ぬんちして秋の意しさそ鳴音
のありひかくなし名ある記さハの月かさた下く
かねる西雲ハ将晴やしす二千里の外の古人のこゝろ
とかくて捨てしくれあつめくとの気すり秋一よ吹
つる風の方より志つまりてと秋の月ハすかてす
るまし記よやく人く経耕く雨ハす後上れたむなと
小ハあしてめるれぬ名ひす衣のう絶人とゝのりしれ
まのく婦め記さましやをのく捨りひの前ぶよすら
小くすかしよの紫れてもさあしてふするへし　夕風

み吹こしわとなくすゝしのかる月山端まくとおもへ
なかゝし入くいとゝ面かしくとらうすれは後代の為め
しるしてこゝろくんちせしうしゆまうけくい
ゆるのこと

名によるれひろとことよのなみしとや
三中の秋乃月をすむらん

後徳大納言乃くわうとりふくくと哭しうらと申し
さ面ふく日枝にしろハんとゝ申しと高なく
侍つひ侍りれ今ハわやゝあるましきよしおほやけ
まさらしくうけ文のたしふそれとゝく安堵し
うちやうゝ侍し朝よりあまくまつまゐる旅人か
とハきれさ面くうちむまてきつうしこみ久
なるまくへゆくあそひ侍しくすゑくにの残る今
むくらの露けさに衣袖のなかにさそしまれあし
らしひとそゝ家月ひとつの秋よのしあわくいと
なくさうくしこんするやうらうの浦なといふ
あくゆく菜のおかましすふれぬまゝいやすひと思ひ
こゝに侍るよし人ゝやあひしうと衣袖のなさし
おすおもしれにきゝめくのきゝすまのさゝてくゆよう人
のすゝしもしとも見えくれ侍し猿見の里とらや
こともさうゑしり不あくらしる猿る葉の花ハ
おもとけりゆてある秋の衣すう内裏の庭とさかう
明石よはまくきく編笑の山ともとう猿ハ又くう
きんなのさのゝなりゝくハ侍るすとなし

おもひきや見しひとよもぬかつらにみるか
いな葉の月を庭にみんとは

小嶋のすさみ 下

そはかゝる事ともつゝおもひ侘てきくくらうさる御
ひとつのなくさめ侍し八月の末従念大納言すてに
尾張のほとりさぬと参りしかは同廿五日としろの
故宮ありし御所に行幸ありてそのまゝ御堂の北の坊
の役にて勝興にめしなか郎衣の人ハみなくえひき衣
とやのすゝめつゝしき事なりさひしくなりし
わらうちかく見ゆるとをしまや風葉北をひくと
勝興ふなしてかけりしそはしめつる事なきし
とかくとめくき事するゐ中の民ともとさかり
こんまりせんとをしけるを見さしうたはなうか
中さし侍りしなり主殿の故実ハ当家の申摂執

康にけ給ふらく侍りますらく思召の御所にハうれ
句と秋ひらしてうりくしく也立殿大業文なと
のんちそせし入御沙の花とりゐるとれともいはく
よりうあ川ゆりきんいふ切し実況館隆綱にさ
婦にふうの後堂ゆきにぬうふ事なし やすみ爾ハ
風と気ますねえし別の宿君を出てよに物のひはし
陀さくりしらふやうしにわかさてとはきうり八名所
なきにとりくもあめつうハぬ布なましと子の隆
伊豫院の新淡の西日になさしてくいてりたる時に
穏也府うけそくとよるん宗ある比芸みの永の津にや
うくいふ称に廿六日乃秋あふゝの国流きらハちや
とみやおの西へうちつるかへしとてひしめくらやこの
芝ハおれかとちや猶多かりける出字しくふん国う
かりしにと秋ハふかくしくひしめこそ流にちや
ちらつさゝるよしや中なくしを傍し羅人々内裏
へ流とひきつゐいう移る後さふとつふきものさひしく
とらくて世とや流くさむとはかなそさそいんとさ
方紀されと暁るゝに別の津伴しぬよし人々や給
りしかハ後のさめしふんちしてとのく湯らてぬ
るゝとと用ぶし臨幸をいつこへうと西あにさ
あうしそのおるとれさはきやかうりなかりしなと秋
中くいまの名ひやた中傍りぬへきさて九月三日
小ね年芸みよ基をのありさ西めくらしいうし
うりし津くまへ二三日ハ武士とゝと隊すさ西中く宿

く小茂かちつまいらる梳のとおにとゝくさとさり
あへきぬのひきかに渡しきそよろついまうんちひろ
くとなん大将りし大綱てハ源乃よろひ記てま
小栗足にて家毛な弱馬にのなされうち結城
小田佐竹うしいふものより多く異見とゝ
水のうろやうなるふとのくるしきされにこしめき
て夕日まうらやく一日乃間いりなとのさくちし
てとのくさしくしくろかんし後浮みハ仁木
兵部大輔小山とゆふハ東国の武士なすとたくして
誠ものかしね軍北馬乃されみハ命露九さ源
詞とそとよれわらつなせホ字一とかえし思きる
水そ葉しらそのなれえ不為し手しけるわ

けまれのすりとぬすへくあしくと見えさせ給ふ物よ
あひぬへきやしれ人らしきくれかさり川るナ之いりまいれ
くに源とおよそめんものゝふとなり東国の名ある。
はのこりなるこのありせるよし御守えし佐竹始ち
なといひし大るとこと主役多し将軍居そすくに
内裏へまいりて叡慮のわらにめしくしける軍兵とく
必ぬめ動く多く一人近に入中門のおにこて以毎
後各騎にて車のよし玉中西園寺の諸お
あひて川等にら矢をとねて堂上御おのめしあり
用しかく両ろりいつ宿所ハ金井の長老か家なり
ゆの不はなしめ内裏にまいり何し禄にお それ中宇治
出させ給ふつき御たしらあしく両りくいらくゆりけると

移りしおほくさ堀井へ流芳ゟ後ハてんてんとさらに與
越しものゝ物帖と比くめく淘るそれゆゑ分と移寸し
流れあるとゝそれ来る家小仁義なとと重れまへて
しそこ生れの里とハきことゟ仍しなにゝかへすく
多のとしく移らけありし湯翁右大将建久小
はしめく上流せられけるとも多かゝく移ハ天きあ
文吉小くありしうハ至上書乃古流小わけ流絹
陶こひさしの家流小狂候のよし日記小みへ侍るや
乃名さと流振の流系なましハりやけてくりと物よろき
りし堀くんと分しさ大月貢る十之内裏へ参らせ
一お別くなるかとしてとくりしひしらハ黒ひある
仍ら移せし十五秋小みちかく流くりしあとて琉

中さましくハ流れ小ゆつられける事となくくはかつて
ありしうといみんさっておほ門名書を流せ侍りし
お門くハおのゝひの御振乃なくさみハきこよろひるる詩
文小くうありし於中人ハ連歌るといふを述せ
すら拘りく琉分しるゝくようおほくや侍りしらに
ふかむつりしうく西しねてハさやふ乃いてきちか
くハなふてうあらん九月九日ハ重陽の流会あるに
とく経冊とう移ける文人ハ大夫に下紹韵の
へとなる陶律詩の懐紙と講をしれく流す方の経
冊など講せられ旅分と移背ハ陶りしさうしわとい
あく流日一巻（ミやくのイ）くとかいふ流小ゆく巻し（いろかん）侍りし
りふうてとおとめその己れなかりせん

きみをよみまさくの句意
やうく治世しはらく絵りしりし河ふむくへ下京と
いふは治世の事なれと古聖へはしまさく流れしたらく
おりし流くそれは徐りし宗崩て河りしやうん
ふかり風いさしう姉さわく菁徐すふ物と見て
あおひ多しく姉さ満とりしく山地本ともお
わく吹とむしよとの栄むくは文字もいきれひらち
さ角ふら姉りいて神なりひとめにねちら訳さ
うらしてつせいんしく南乃おしわさ治やきろは
ゑかとぬりぬ伝しはしめにかさとかつりあへきて
あて多らしされはさはいか形る事あうと承まと
ひいらんさかし すたく晩と山とてやあふなり
よそく内裏のみちとこちめはくぬ衣ふいりてそなく代おひ
そしく吹まさ治風そして大くいはは大心志本のは
らぬれるつよりらいくかくちそうてせ所へきさなくねく
民安るといふ示へ治平あらと三皇院當正とよりす
やわり待ちとあまて治示まふさ治いとあつて以
変なりその風かん満されみいとふ見くりのらとと必
けもとおさくて凡へまへふきくひなく風加ひ還
牽とそくする事あしとさしとるす 茶せしくは
或あらにとやりてあす徐あらへさしと すく
ふかて作りと 作るあて人々高いきくろ必と志い
それの作事とて治の人くめされしろと是いとやの
非花乃代みくとしさまつとぬ おりひくふむしめ

きく侍るのあしゑもの督殿しく還御ありて
鎌倉宰相中将家みに侍く寒しうハ給のたと
あきそめくたしとなのめならす紹ひ給くさらに
宰相中将宗因す王え給招待つりしはからはれ
宗と頼て人こゝろかな給衣みく侍従武侍るになかなかとまして
それよりも石山へそ侍り施本堂の前に侍ることまりきと
よりさかなりしぬ海おくとさえこえていとあはれや
観音の利生方便とこのみゆさふハいとし光をふ人にひく
めくらしさかふ小洞院大納言殿より侍りあひく
侍従乃人みなくはか内侍司ゆことく雅殿実行經
さふへ陸家殿侍殿衣みく侍りあひくも興乃た
右小侍従えひす衣の次殿しとハ御沙汰ようち
これより義詮殿は小貝の家みく先陣仕まつる宮氏
御同宿に供奉すその軍勢二三万騎とあつはらん二日
そのりハ侍ゆきせうと持はしやらくものゝ御書之
いし筋かりし侍て宰相中将殿中にえ見らく殿
行幸侍する遷幸のミさ八條に家る宇かいされかと
なる代我衣の人く門前まくらはなつりしり右府に
遠興よりも三御殿衣の人ゝつけるも庭こそに渡す雅殿
さ後侍御小作まて百殿とて人しかふゝも此西内侍
侍あつし給へこまろしおりしるの知とうけめうらしと
いふとなる代世の常なりあの内とうつゝ侍る振舞の
若君もひハ御人に小屋さくさやもちくてるくし物乃
奥の御さりともいとつんうもれく見え給ふかくらし給

又ある人のかたり侍しはさきの日源為二位よりはしめて将軍
いさゝか遠行の事ありて三郎とは加茂すへく佐すけ
松殿中納言忠房卿は八条中納言隆ともに右衛門督家に
師房卿父卿とし隆房左衛門督にもかはし衣冠にて
きこえ給へるのおなしきの事ことしいふくもの御
ありけるつゐしく見え給ありけるちかの紀綱見白近衛
基輔ある人々さ京にて下をしはりてありし権大納言
今出川宰相中将殿とかな公忠卿公夏卿には御孫に
侍らせ給ひしかはをくりわそまうりあひ給ひけるそと二
條中納言なし給はとなりてあさよひはあふさの人々の尊と
いふ事ある御のりあひ侍りし秋かつりて四いてう
帰りて次の日の朝まてなんやまきちやけといふや
おほしけるに徳大寺の宰相中将すてにかくのよし
申給しかは此御事ありけり今日人々諸役につく佐すけ
ちよひは八幡御幸と云事にいらせおはしし御まへの日は
のこりなくていまはいにしへにかへりめてたし京に
ある人々京極摂しきの事まねはしかるへからさりけり
宇多聖帝の御時は納言といふはこのとしかるき
るに御座さくして九月の遠忌いとかしこくあるは
元正天皇天平三年菊花宴のことの御事あるかくる今乃
書き此節御しるもの此覧なく此の節乃めてたく記ゆへ
手寄とありしめて天平三年と見ゆるにはなされ此遍
奉ありしきれと九月の恒例となにことか宿称らん
かく申侍し此のくらひの代にかはりける勅例とされ

めく道とおもふこゝろしにやうちしすくかゝりつる

なのしき後のとおもひかくしわひとかりぬくあたのま

まの事を様子のつもしくおもはれしに危うかりん

のちしなしひきやうて女房らおもふといふるえましし

すゝめさいけ御あらはれなしひとれハかく非常の

こゝのほとをおほゆる也の歌あまり書すとハあなとゝなを

侍しさらん

右歌さしハとし御まゝかきしもりし御しなもあ

まもまいの歌はかりなる紀みや中をと可限しあなと

けうすなしけしめハそこちの御ことの侍まをもちと

良基公　御判

依持光院法印（後大僧都御捻）見除不肖二春判秋地之朝御書

切矣

右本者後普光園摂政（殿）述作也以被首尾筆之本（将軍家御本）

餘寫之校合之也可謂証本者也

文明十二之暦蜡月上浣　左近衛権中将藤原朝臣（判）

かれとてもむかしとゝもくこひしきすまの

山の秋さゆるみちはありけり

此一冊者於西園之旅店一覧之次不深見借也旅

宿念卒爾模寫之追可清書者也以貴之

天文廿一年閏叟四十又九　戸部尚書郎藤

判

元禄七年戌六月吉日

京河原町　銭屋仁左衛門

江戸住之　銭屋三郎兵衛

借寺本氏本謄之　前本筆者　上巻（十五丁）　藤山卿滑助

下巻（十四丁）　寺本十三郎直道　自寛政元歳六月十九日至同後六月十二日写了

文政二年冬十月自七日至八日写之　中村萬喜直道

予按嘉慶二年良基六十九薨ス号ス後普光園院好和歌家ニ多旧記

借武家威借寫諸家所秘以藏于文庫且節

輔以来累世勝家日記皆在其家所謂二条殿日次記

是也中葉欠今存者猶貳百餘巻頼長兼實日記家諱り　著ス百寮訓要抄

榊葉日記　小嶋筆占　貞治御鞠記　諒闇記　大嘗會記　雲井御法

及白鷹記　急鳥平家　又有伊勢物語愚問賢注　近来風躰　菟玖波集

連歌式目　小夜寝覚　熊谷氏和書　紀手録

直道附録

序

貫之か古今和歌集の序に和歌は人の心を種とし

てよろつのことの葉とそなれりけるとかゝれたるまことに

うたの水本（ミナモト）の道理（コトワリ）はこゝにそおほえられける

ゆるなよのうたはまことにいにしへよりかゝるやうに

てこの時のありさまを今みるやうにおほゆる

かつよのさかり成けるやとは歌のさまもまさ

りてかゝりけるに古今集えらはれしよりそ

はそこはくあさはかなるもいてきけりやかの

貫之もその流の哥はそれより伝へられたる世のい

こ伝ひは伝まてくや古今集ふれられしうさ

まはかのうへをいそてたかすしと行くぬとみえける

もはらみだれたりしのち寛政の御代にはなりて世
中礼儀も猶たゞさゞりしをいちしるくしもしられか
とすれば古の風にもかへりふる國の色見えぬく
人もいつかは王代みいでさしれば上古さ
まねびとしひとにみえたるもあれど人に猶くあ
さはらかなりし俊成定家などいへる人のものせられし
まつはとさくしもみてきこゆる風情（スガタコヽロ）とい
よくあさましくそならざりけるその法をなそあ
の家などといへる事にしかきこそ詠歌のみちはそれ
と流へまで平和に洛世もまいくみてまでくあ
さ自しかるしれりける代
君の御代おやの御神世中まつとさわさせなまりて
四の海治まりて民も安くしとゝのふまでそ減するよりの
いさゝかも古にかへりかへされたりしいとゞあらためて
新たなる世のまなびなるそなれそかはりけりし猶いまだ
よもとき猶あらたなる世をつかへてなほつらき古の風を
学ぶ人々もまく古来よりより臣（オミ）いはんなすかなる道
化好むといへるもそのうゝいまだ流の風化好みて
亡國（ホロビンクニ）の風化まねられむ外なまきりし古代風化する事
あまたもありつらじかしけれかの猶その道の猶みそで
なりゆくなやゝ殊く壮年（サカンナルトシ）まで古の風化減るを
去りて亡國の風化まねびて世にあらんことしはべ今に
いふらそあまね治乱（ヲサマリミダル）のよしあるが事化詳（ツマビラ）かならずして
まなびくに古の風化よふこゝろをたてしかれも世中

浮俗の風となりてあそひ猶これなまめかしかりかまふく
あやしきを好むあらむかの俗の風あれは古とかい
えそ人の耳にあしくまゝすゝめもは先にこそあ
やしきを好むみまゝにして君子（ウマヒト）のまことわさ
なるもえもやむことなくしてひとり古の風とま
かふのく延享ひのえとらのとし九月のそのよ
しるすそ

参議従三位右衛門督源朝臣宗武

歌體約言

そもそも歌は人の心を種としてよみいつるものなれは我
心はつくろふことかくもかくもよみいつへき
なし然るに今の歌よむ人は今の心も直（スナホ）小式（アル）いか
さくかまあらんたれかうたは哥まもそのわさハ
ろくなき人した我心のうちなれはしあハ弁（ワキマヘ）知りし
うけもしよみいつるは我心もよすあしあれを知る
くしらうくなすや物あしと思ひくつうけまもく
心改めて読うへをたしまし繁を修てその誠
をなつし聖（ヒシリ）の道ひろもめつる事なる絶し
かくてよろく人の心を直（スナホ）ますする侭もなるくあれ
のちの風の歌ハなのうんすもなれあさましく淫（ミタル）さ

る事侍るハむげにたゞならぬかたにおもひなりさ
偏にいひかすふるとも一として侍らぬにしんと宗
真似せさるのみか害をさへえねたくなりゆくめるを
抑古の風ハよまむ人ハ古言をよくわきまへ知べし
まねも以るこころさへあらんとおもひしてこそ俗を交
かゝるものなれハ詞たりてハ後の事かくし
絶（チリ）に雅世のうき人ハみてにそえ見るか詞にハ
やしはまりし媚ひてよ尚おもそれ人のひとくよ
くらやくに流てややく成ゆるとは偏も流
こしれはしこらり成に却て古の詞を縫（チモ）にする
事たるまでたゞひるる事かと見まく古言を
解（トク）するあらさるをのみ才のみ（かちな）をかく

さむ為にかくハいひくせしなり（是によりよのハされ）
て世の人つひに古言をことさらに絶えはての世のうちに古
言にあつかふすはけしからぬへは古言のこゝろひとつ
ともとおもひしかもゆゑにむかしよりみつからる事を
去俗にえいひくされハ雅の為にむかし（加へ）て俗（ツイ）に
済ひしるしにつくる古の風ともせむとても強（アナガチ）に
しひに古言をとりかむとするはあしくゆくれ
つひに詞のはかりにんばかりふるまひなむたゞし古の風
雅の風のわかち（かはるは）ハ妻に詞に音調といひて割様なる
ものハ雅の風古言をよくふかみて心しくあらるるを
ふるものを古の風といふたゞし且古の風にはもかはり
なつかしく古言に違ひて古言に違ひたれハ我世の

古ぶみの解まもて萬よめり人麻呂等ゝは哥の
躰なるよしは中ゝにもいひたてゝ今の人もよく知
りてぞ作る擬その人たちのよしとする哥は古の風
なるにもあらずほのかにそのの風と学ばさるはいつれなる
人もよみけん却て中ゝはその人達の哥をも詞な
どあらためてあしく低き風にしかせるなほしかく
むくはなる萬葉は中く哥よみえぬ人はたやすく
よりよみならへる学（かく）ぶ所はとりして人麿赤人
の風体と作よむが伴古の風はありの作し清きもの
なれはあるはよろこひあるはかなしひあるは恋しみ
あるはともしみあるは花見あるはいましめあるはたの
しむがその如くもはさやかにえてまことに天地
をもうごかすべし此の度のふみはやしなふ人の
くるしむ業ともしらしめしかさねて婦もの
そこもなら下思ひわさ繁きなとの人はるかゝみが
よの實なる様くんもあはれとしつしめる人業
なるとあら縦しか武蔵潤ふのひけらく古今よ
くるしくとふりくるなるこ縁に侍
さのつらうま歌もいかしかくま
と清さるやまとは絵めく人のあはれさみせける
なま男ま志むてらりなほなるま様の世のこゝしとしち
ともて
詞しかくそて打こらし人のはしなかし
さの深の如き音のゆへかるまし

と讀て侍れは紀氏もいひつたへてそらくし紀
やうはえたもしけしきをこそくちをしけれはさ
こえて都て供御の波の雲のかよひぢえん西行紀
かそれは月やうされしとなしさる人ともは
の雲の路をかはしらぬとやは侍るをなかくも
なる事ともなりしらぬをにも侍りて太宰なる
人の害とも成侍らぬをかねなを罪なからて
雲の月とはえあやしひつくし紀人も者其し
人はかくさへなかりかりたし

掛まくもかしこき檀尓の宮は初是志しし天宮の
へのより從ていて次して日のおくのうさとむなまほ
よりも太御日嗣のいやまほしくまみさかりなるに
まもなん盛まりすしかりは七十御嗣あまりの
御世ところやをそらぬまし繁まれこのまて萬の
みちすまれまつれはなるといしまくもそれふに紀
ふくことの宮まちつけりまほ
大御神日のいろかつよきはまそれ日のへきやしきつまて
あちのひとも今百年餘りまてちぢの葉も
のみさかりなる御世のありはかまなんなりなひさりける
志をみなかまなひやしなん紙の人あつて流けり
此世の風ともなるはなの事のことそなほたまかくてさる

事なかりし
大神のみすゑ九継まて今の大みかとにいましまして
なかなかにほしのふそめそしきやそ伴百の伴（トモヒト）
をり日にまつりてちゞのまごゝろもて古言をともてあ
おうむかしひすしあれかは古のたゞし風ぞ
あるそはのうらへるんばあはあはうふみなくせ
かふとかり僕（ヤツカレ）真淵（マフチ）かくしけなやしも見えとつ
もはらくは孫もおな成事いころの日ぬめくれ
これらふかるへむ家ハなつの日なしてたらなまひ
おうしも真ははまろれかまもてらし見り出りね
くまかんなよかくまてつらくなすかわさら去
百石（モヽシキ）はこゝ名きこえて博士（ミシヒト）らの文よみしらん
えらぬ事にしてしつらもおほれかゝりせのふは日ゝと
新世ゝ祐あるまつらめ旦見とも日のおつすゆ
れこさせむへハ日のいうそゐもうけていふふみちぬ
なふれの事ならなる絶しいつてひとりたゞむ
色のふうやれのむさんとゝ申そにみ日いふ成日
まして彼よめしてその如（コト）く則書てなれと伝ゆハ
それはひと宮ハ稲（ウヒ）自（モ）物ふかみつかて奉くかし
こまかと一たひハふゝの宮のふへきのひの志る
らしめのふ付え成りりと太そくとあふまて
揃（ヒラテ）子ともてよみつらひいやしく祝（カト）なれとした
まうすれて申そ

賀茂真淵 謹言

此文ハ高木氏よりかりて安政四年の秋なか月の
中の八日後役かけて写しぬ

中村尚道

西行上人ハ二見の浦ニ草庵をむすひて浜荻を折し
きたる様そあはれなるすまゐ見るもいと心すむ
さまなり大精進菩薩の草を座とし給へりけむも
かくやと思ひしらる硯ハ石のわさとにハあらてもと
より水いるゝところくほみたるをおかれたり和
歌の会の文臺ハ花筐なりけるを扇やうの
物と申き歌の事を談しけるにも一生
我すこしも来世をねかはしといふ文と庵外の口
すさみハいと詠しあはれにかく見えしかとも
うけの陰役多くなりしゐのしさて今ハいつやら候
たゝうるはしく四中しけるハ上人云和歌ハうるはしく可詠
古今集の歌の風体を本としてよむへし中にも

雑の部とおもふに可見侍古今にも家々に撰ひ集る
かしありし古今の序なれはとて序とは詞書をいひ
哥の詞として侍る詠むに風体ともいひ侍るは
おもひ出の序とともに雑にはおもしろみなと是にハ
定まりてはかりそとおもふ月替分にして
春霞たてるやいつこみよしのゝ吉野の山に雪はふりつゝ
この哥なそれやいつことをわりつしてやよいへ
よしのやいつこといふて於修し給ひて
桜花さきにけらしなあしひきの山のかひよりみゆる白雲
いさよふ花さるむ旅よりさてかくれさるにはなれの花はいと
霞たつ春の山へはとをけれと吹くる風は花の香そする
哥の面ハうつりかはりけふつゝき秋月よりふるかのまゝ

みよしのゝ山辺にしらむもそこともみえて霞ゆけしき
和哥の手本人年返あひ読しれしと思ひとて
とおもひあれはしはしもみいひまことひしこそあれ
春霞たなひく山のさくら花うつろはむとや色かはりゆく
桜花ちりかひくもれそめてきもちらなんはなのさくらに
春霞なかしかよひ路なかりせは秋くる雁のかへらまし
はなりと替る中宮の御屏風にうたときつ春霞
たつも出ると秋の絵の所に春霞いつと
人あられの霧とともに置て不定けりとそて志り
めてみな書たりけれは御覧しける人々目とめてん
しきよ之てつり深や
月みまはちるよ梅して出られ秋月ひとつのはなはあらかし

船をはなれて飛鳥路にかゝりしきぬかけふりて人[illegible]
見わたせば山の色も一つなりし吉野をさへ人なみにながめ
夕されば衣手さむし三よしのゝよしのゝ山にみ雪ふるらし
住吉の松を秋風吹からにこゑうちそふる沖津しら波
など詠しけるをはおもはるゝ音羽の山ちかく月も
此ふもとの[illegible]つくりのこ[illegible]山のみのあたりて人まゐれる
[illegible]の菊の山の桜は人皆てふのしきりに[illegible]
見ゆる山をふもとにて相坂の関のこなたに[illegible]
見えしこゝろ[illegible]家は[illegible]の北川風さむし[illegible]
白[illegible]のつゞきなくみえし列[illegible]晴てる日もきぬ[illegible]
月やわたりぬらんや昔の[illegible]しぬ[illegible]ひとつ[illegible]
音羽の山に[illegible]人[illegible]なる人のあはれしと[illegible]は

此哥は業平朝臣のよまれしは伊勢物語の大和路なれど
まゐりて奈良坂のこなたもしかする所のあたりに上りて[illegible]さ
まへさせてなみなみならぬものの深くて京のかたを見
やりてよみ侍りけるとぞ人のいひしもきゝつたへ
あはれなりとおもふ大仏へまゐりしまにまにきこえけると
こゝに[illegible]花みせさせやかしに帰りつき
あるあひだに小松虫の[illegible]しと[illegible]あやめ草といふも[illegible]
ころもはれば[illegible]菊の[illegible]とこそ[illegible]うつりゆく[illegible]
相坂の関のかどを空にもかくし切たる[illegible]となく[illegible]
音羽の尾上のさくら咲けるかな山の[illegible]たなびける[illegible]
菊の花も秋は来まくり山里のかくれのぼるまで[illegible]
まつはなくまゝの[illegible]の浦風にあらはるゝかなみちる秋の[illegible]

なけやなけよもきかそまのきりくす過行秋はけにそかなしき
松風の音さへ小松をひしめきて衣しほる野川の衣を
まひ侍小松をさしかざして見わたせは山里
山里にいかりのまゝ木枯の音きくかりそめならぬものうき
あさまのさとにて人秋の空をなかめつゝひさしかれて
よの嵐の後の景色はかなく立いてむと物うき海
わりなきをまさる事ありしと物語にかたりとありし
まことにいふにたるみやこなれや
あはちしまかよふちとりのなく声にいくよねさめぬすまの関守
松嶋やをしまの磯にあさりせしあまの袖こそかくはぬれしか
須磨の浦の塩ふきつゝもあはれてふ人と見や
深みとりかはらぬ色の松の木の下紅葉に秋はちるまての思ひ出ぬ

或時人に語て和哥の徳ありしにその徳あるを申
侍らん事いかんとて紙にかきてみせし申
君か為一枝を折中の梅のえたは紀野にもにほふ
この事をる人にもし申さ
いにしへより歌の徳ありて和哥に當る世にもてはやされ
此道にあそひてこれをしるへ人に心得ぬるまゝあられ
なりきはさくらの下句新古今にも人すきにあるときあまた侍り
上人もはやとねよろしからさりしとかや
ほのくと明石の浦の朝きりに嶋かくれ行舟をしそおもふ
人丸のうたをはいかにすくれたりといふも人丸の上
梅の花それとも見えす久方のあまきる雪のなへてふれゝは
此歌いかにのへのうたはさもあらんと翁に尋ねくれけり

いやしそ思ふこゝろハ詞のよせ也とはりひかぬへき程
のこゝろなり梅のちる事ハ哥によみ花の命もふかう見えたり
あらす大なる哥とハ見ゆと云也けれとも此事はいつも経て
哥からやさしくよみませむと思ふ所也と聞え
四條大納言西宮大臣まておもてふかくおそれける時
大弐高遠三位卒礼小下の禮にて雑かきて新古今にひ
まはれくちひて大納言のよふに詠集ふかゝられハ特に何
合たる人このおもいろる事まて不肖の人のことをいふ
ひきはしらひ詩歌よる事尾籠の人歌とはゝくき
ろしやうりきて大納言てかゝる對面して宮て西方
の事ともあさむすむしとそされける諸とハ一首もいふて
貫之哥の中に

相坂の関のしみつに影みえていまやひくらむ望月の駒
高遠か哥に
あふ坂の関の岩かとふみならし山たちいつるきりはらの駒
此両哥を見られ一二度詠し給へハ高遠か哥まさりて覚ゆれ
と思ふ夜詠し給へハ貫之か哥よのほとまさりてはゝふし
書出す事の何ゆへらんとて集ていとやされけれハ大納言
かさねこれて落涙してえりあて公任くれてのち
られゝ哥を大事まをもしんと思ふ人かまて御くさし嫌る
かくなる事あはれあからくはしてこの句をと二三
たんせう評して貫之哥をさゝ詞のよせもなかる
うかいしくいひなしあつけさハ関の岩かと事になれし
と云ふると山たちいつるきりはらの駒まて詞のよせなく

みなの都に聞え侍りしをいはれ候はゝ此當
中らんとて来てはべりしに不肖と仰せられしかとそ
申しまゐらするのち大納言の御人末代まてあるまじく
や覚えてひさしくなりぬ和哥の後代の故にと
云はさりしにあらんやとて其の日なりけるさ御免雅家
おもしろき事にて来て御へといひて不肖の孫なり
とて門の御はれ候ては唯今ひさしくなりはれ
舞ひしはまことに和哥の道なりと人々いひ
けり和歌と覚えたる事はなし人の人をかくそえられ
橘為仲なとよ陸奥守にてくたりしに白河の関を通る
とてよみける時長橘為仲にて見しかは其一首
よのつねもあやしと思ひて出はいへる御事なりといはれは

白川乃関をいそきみくたりしてにこそたちそへしといひける
やさしきことの也大にさ侍るを故古の深きにいとゝまさりてよ
世人未なるよしおもひて古神主の神主はいくさまよくよみて
和歌なとこの集にいれまし）京神よりこそ世にふ下）緒の
古の神とそれかとてよく感ありふ及ふなり抑和哥を
行きよいひつる西有のうちの心になくてん後下）世に侍
のやしまさせれ詞のくなきもなくいひかけ下）絶えれ侍りて
詞のちからしむましきをうちきよらかに侍らむまくらやと
こむそくもてしせきの空もかなし）といひ山てち
いひきり来の詞をいひたる侍りて詞の也一首をみ
まてよ乃後と為ける御侍ても下）此等覚えてうたまよ
なし歌道にはそれまいれしり侍れ共てさる其の前か侍

このうたによりてハおもむきたる調のよせんと詮ねたるの心を
なり給へ人てまろうた色々人ハ古今のひとしの大概よりも
らもなりつべき屏風を書てねやしなりとわかしらハいふ
る屏風をよらるゝやちかきらハたきハ給する事まて
あられり屏風ハ十二帖）延喜十一年十二月宮云歌より
望むらる事こ月この事と十二帖ら絵をくらへてそ
中よりえ示あれは給ふさそふの屏風をそらつうたり絵巻の事
もえてまた附やされたをして給ふ以書

和泉式部哥に
くらきよりくらき道にそ入ぬへきはるかにてらせ山の端の月
この哥を和泉式部か性空上人の許へおくるとて人々の許
性空の返しやらは人とりふやきおもむきそなる事也何のやはらき
けふ古酒を留てそのめへそくきよくくてさそて
の文に從冥入於冥この文を詠するハあしきある事そ
猶と思ひりぬるしひそしそなる也あしの人をはきさて
人の見よりへきまりもしひきみえ人麿の人はゝと
まことにむしくてあはれ行
これ婦やそうち海の調食よいさす給のゆく思給て
世そら人の日らをしてよめる哥
おもはぬやましくねらし寂ける也給ふしてあらわしれるか
興あるか
やよいかしみをとのくるゝかあまくれさせよみつて かんり
とひうはしわきもこ
此建風吹そしか後の松のこへをきつくふを波

ちらしかき歌
名にしおはゞ田の鶴塚も見えけれはみなもおもひに秋風吹
うつりゆきしより所
鶴塚といふ名を世にもとめ出したまはりけるとそ伝へ
ならしの所
はるかなる鶴の跡をたつねて鹿の子まだら秋の山路
上句雪積りけるときの所
おもふみよ浜の大井河みなかみの紅葉に御覧しけるも
せうせんは中納言定頼の所なり一條院御時大井川の行幸まて
御供せられける時四条大納言にかはりていひてもかなしかん
中納言よくしらひしとそ聞えけるとてこのうた
みさなくみえ御幸の大井河しらすへきにあらぬ御覧しけるまゝ
まや不覚してけりと歌の姿をもつくれはふかきの
紅葉は雨と空をもこしみあらはなりけり是字
侍てけりとつひて歌の名出来てとられける上句雪積
なりしれをなりゆくゝも絵をまはり候分よらは他
大かた上下の句を尾相叶てこそ風躰一躰なるへき上下
不相叶は句うへ音時の野にて音をきく説きしなる
やうかる事也和歌のあふしあやかなしやふるひとそそて
其も句をひとをさうまかるおもの文着をかへさの紙
そてきるなりき申まさりつて三句二句かられを裏
はてさらてさ尾に相叶和てきる物あせ御題いと
てあるふりまきてつられをみ聴きゝてやうらいさて
上とうつむれなりつきねくとさて無上そワカノ記

首尾相叶ぬ也されハ下手ハいかに上手めかしても能書
人まねをして見なし其事とも許也天下首尾
好ミかねさるへくことある事なり然れは首尾
一切の事に修学て頼りやすきにいとむつかしき事なり大
かた諸道好事其志ひとつなり、
侍従大納言成通卿の仰しハ蹴鞠をこのむ事ハけに
あめ下にも立寄てとこの梢に鞠のおとれんないか
まりをつくりとあんするなりと仰しやう千日好とこそ
思ひ千日ミ給ひ大内のありしを其通に一千日の鞠けに
るなり雨の日ハ大極殿又不肖の時ハかきおこされて
足ニまりをあてしなりと仰られ後よりこそしあり
おいつさとなりなれあらしかく行住坐臥まんと

前にも千日と仰しし後まりの上達ハいふなる自許
ちかく上達いたしやかて覚のやふとかくつかし人
おこしを人のすみあへしもよりも無てらもすあのちかて
梅の梢よすすんてん事めてる侍よ覚るし此の初
何達ハといはるしるらい詞にも首尾叶まり
為てものハさ許よてを入れハいと見さしと侍りたる
毛ハ侍るならにくの事にこそよきも秘事し
小児のまりしあをとえてる時の許
皆よみしさハみくちやりしきこそやほしき母や五十歳
女きいハ愛三ヶ母の九十まてあるし候ま花和下にふる
詠吟して落涙しけ利
本出ちるやすてきくやくにてるたり時分雨するも

むかしハ藤原秋實人命よりてくらさとなりよらひ廿の時分
まひ大事にて忘れむとしきれハ気いつく難治にて医兵
なりしをりして秀哥を詠らんとてそ住吉大明神
まいり祈申しけるやう秀哥はよませてたまへと申しけれは
いひけるに御夢にあらはるる七八ばかりの翁の神
（たちまち現じて）
本意ふかきやさしさ心にくくそれは有時母のよきもはわりしやを
むかしは六年までありしを侍らんと祈申に依て三年の露
とりしをりけるにまかせてひろにあらしすやと詮無と語れとは
執着出れはて云この侍いさなとけりいつはりやすくさいの
ちをよわしく侍りにとして三日ありてありて死なりけるよき
哥は誠にやさしやすく出来にし祈にまかせさるまし

少将小蓮阿（俗名具明）となりたんしすこして月讀宮に六年
月まうでして祈りけるつき宮侍禰宜あしはされとともに
て和歌の冥加を祈らせし祈申けるに千載集に一首
（まし入侍てしも）名字とりて作者入まじきとありし
遺恨なるに依りて又まゐりして又祈ありて和哥と
大事として六年修行の春秋を送り昔上人会和哥を
好まんすむ故に忍念なくて後世を思ふともつとす
（世をのかれなりしいつもよしこの年）御まゐりける蓮阿
満七十のとし臨終にしてまりひて世をのかれて後も
出て念仏まうしも寺一向に浄土をねがふ和哥を好
しつて遊んとこのめハ実にあはれをしみやすくなん聞
月讀宮の神垣に参ては六年の祈誓のしるし

神國のあまつさまに進行御代に任せ、は神なりしするもの也
君なりて和や和歌をこのませて給ふ成徳して
發句ますくみなくして作者の同ぜあるへからずと取方段
有りけるにこそさるべきは花の波の様をきるうる皮の手
の形語乃趣をし備ふるは翁しうの祢詞あるへし
連歌はいかなる殊さらしゃしらは一その歌は直衣
なくても歌は哥干あてきの所なる人皆志ある事歌
事なり太平の寧統の端にて人々いかそ深しき
歌を連歌まさしく寧統の令を壽此人は相宜
神のよふ、れいむくのほの下抱らし
子くいひとりしみをあもこに家為るし
發句のさしあへねしとふをそある
これを人くらへしあそれなりき自連歌を本とする
まなびしこそ誹諧の道にはいふなり抑其道まれなる
一きは事あるべき哥よりの口やらの骨法をたゞしぬる句
連歌なるは興ある句体をかく作るべきとき詠は
てよろきとも句とみそいひても骨法をたゞしくね
なりゆく詠は人々よくなさを本とし相続ふ人もあるに家
をのしくは興有し何をも続もじもいひおさ
其哥あるは一その道まるみて多くの哥をおなじき
句出来と人すらめしきむしてひかをとは花鏡の
事にまさるたいひ出すさしときて前の句にまさる下
し詠事の勝ちをてといふなりと申せそもしろから
あるとの哥あるは一拾遺あの花や七五また一と

筆とやらんと申しゝハ是をしるしていと捨さりし
なり維をとおもひなりけり此和哥の道の末にあり
上人ともいはれぬ筆を餝てやさしく語るよの　併
至る蔵のみくもの絶ぬを業す

西行上人和哥弟子蓮阿以自筆記之
西行上人和歌弟子蓮阿俗尾崎次郎
滿良神主者家田大長官二祢宜元滿
二男舎弟家田氏良也西行上人和哥之
談議謂西公　　談抄書自筆今書之本

奥書如斯
此抄物之趣者如一見津上人所存
秘露顕且域道て為肝心也哉
依之間書如此草子記好々不可有
外見者也
藤原基
元亨第三之暦大蔟上旬之候
依禅令重書之和哥深奥大底
備之尤可秘蔵者也不可有他見而已

此本予依相傳畢 判

此一冊周防守代々依所持ニ借

塵壺窓前ニ書之写見形ヲ記也

于時寛文八暦五月初旬

借寺本文字　手跡筆已歳七十六

芳寫畢　中村萬壽直道

女官志　上

中村職忠　撰

女御

周禮にいはく八十一の女御とは天子第の后に次く

人八十一人とそおかれ侍りし中頃より御息所のみ

おほくなりしかはそれよりはしめて待りねともそのよしのなき

こともなきさいのみそひしく侍るへし　御息所を

爰より中古の後は御息所の御方々の御中宮よ

りは此后の後を后号とゆりて國母の后号をとらしむ

ら給ふなりけるによりても后代ともいふへし　これは

めてたきことにかなふへし　后に成とて中宮に侍るを

よりては江徽殿の后承香殿の后などいふて侍るより

后と申代は絶ておほくその名の家をもなりけり　皆

后妃の女御はかりしかなるへし

御息所　更衣

同しほとなる人も後にはまさしく御息所は王子のおはしまさすして大きさいは嫡妻の位にさためハ入内もし侍る更衣は　主上御座のいとま内々の位にのほし御の女御なとはさらにおかれゆかりの御匣（匣ハ函也篇海ニ）にも同しやうは用ひ侍るはかくやありけり偶云とハいし侍るゆへに拾式の事にすへて記す　従五位下源氏御治たるゆへにも侍るなとその官の品是和すへ名称ハ後生大臣以下の女御もなとは更衣大納言以下の人の庶流の女つかふまつるなり

内侍　尚侍二人　典侍四人　掌侍四人

此内侍は三の職の事をうけ合てわかちて申けれともその中にさのふしとそのうちに尚侍をしのきたり侍るなりあへて蔭位宣旨をけかさるなり　女嬬と云職あつかり事文字中の礼式と不知し命婦の職事をとさゝむ御事様にて其事一の上座大納言の中務卿はすへさとりもひろく侍る是へ小指後実は大臣以下の女ことにさいつも侍るも下臈の内侍といへともすこし侍るは位つけさまうされたる是は指掌も其の諸役の也をはゝかり侍るなりと代指南ともくれ従の内侍読人ともへて六人まて保しあらはされ花文大中納言以下の人の姫君は名家の息女まいらせ請更の女まての御事は此内侍四人はとうけて係ともあらと人とも申す一の内侍と勾当の内侍とも侍るなりあへて蔭請宣旨といふとも尚侍ハ有名無実の事まて勾当以下の内侍これを代々さまり侍るゆへに人をな

令義解曰侍
候也侍於
王之左右曰ニ
令叙

例女房の事是にあり小事にてよりの奏状は従五勅旨勅問の御事申すは勾当かはりを下しける口勅とふもこふまで申さきかせられし侍る事蔵人の宣旨のためし

始に女房の事書といへるなりそれは広解勘文に侍るある
おくところ有事しいへり故に此出家なるに兼るかくいふ
てまへの事申ふところとけたるとろ勅勘なり蒙りて
その事をとゞめしと御まとひへるなりはしさ在りて摂政
大臣の家にこの名目侍るへ事にて作られたれども大臣の
いぎやかさ遊びと代継ぎの外にこれ作る事なりもまた摂
の御房にも名侍るて諸家の御位すらびに醫師と卵
外の諸臣并男の事をもしか女房作らるさえら侍る事なり

女官志　中

小の政所

おもとはおまへせての女房をそは侍らで摂関とつけしまる家々の妻は政所すりはしけるされども摂関家のもぎる人の妻とその前夫のいへりて妻の称も侍る事なり

御匣殿

常は御匣殿といへる所をいふなりこれは御装束のことをつかさどるところなれば女房の上臈（ジヤウラフ）上官（シヤウ）のうちより別當（ソデ）の局と申し侍るとも親王のうけ給はりく大臣の女の称号となり侍るなり

（令釈曰命者爵位之別称也男子亦然也五位以上男子号命夫従二立蔭之次第而以内蔭而称内命夫二以外蔭而称外命夫也）

命婦（ミヤウブ）

内外のうちあり内命婦外命婦といへり内命婦といへるは禁中に御つかへする女房のうち五位已上の位階を帯びたるをいへるなり外命婦といへるは叙せられたる夫の位階によりて禁中につかうまつる侍るといへるなり此外に五位已上の人の妻なるを又命婦といへるは天孫の命婦とて内外内侍なり物語にみえたるとぞ

（大理ハ検非違使之唐名 廷尉又尉ハイレノ唐名也）

の令史といへる同じ事をいはんとなりハ王家の官名倫にもなれ和漢ともにいふとも京極の黄門ハ王家の官名を倫の外を用ひ給ふも浄御原の御旗にも佛果にて御機嫌なく給ることいふ代とも書きしも給ふは我朝の天孫にてこひ務の相まで王孫の叙郷となへる也と御さ漢也を戊ら御漢に通ずの称して王孫よりおこりしや給しんされども遠流の遣を用ひすりき靫負（ユゲイ）の命婦といふ御ハ所令婦の孫にて給ふとは華の大宮の尉となりける大理の判官の妻なりし廷尉の尉ハ靫を負給ふなり后は宮嬪（キウヒン）世婦（セイフ）と内命婦と称し五位の妻とが命婦と称するより内外の名有るに給ふなり

上﨟

男子の可否をいはんとして二位三位の典侍（ナイシノスケ）と上﨟にの内の家人なる事を召されども中﨟源氏の事によそへ給絲の淡色ならぬはわすりつゝ其ほかの下﨟も一向者ら給ふなり

刀自（トジ）

是は女より殯とうきて老女の通称を給ふことをいはむと申なりこれやまことに刀自（トジ）と二字につきてそうらさく低見女のやうにおもはれ給ふことにしは和訓にそめとらいへ女と家の略してこれと三より下略にて入りぬことしいへるを老女とかくとはものも増もされは老くは其の為老女といふんまそ給ふかりしるとを家の所なるかり刀自とわきて用ふる事を婢女が申すてむて刀自の職事また酒殿の内日をつかさ神事のかはにて内侍所の神供とをひとへ（ヒトヘ）によりる物なり常には衣架（キヌカケ）衣（キヌ）の装なりされどもも代の草をつねとるといへども中

縫（ヌヒ）の常と申侍るなり内侍所にては小忌に加世（カセ）加ハ（カワ）らせとら
け侍るなり

女房　おほうへらう

常の中に召つかるゝハおほうへらうと云なりおほうへらうと
んハ摂家の女房ハ清華家の女ぐひを指し侍りて一
向に給仕をもさせず御かたへまいり禁裡にも院にも
小上らうとよくらさハ大中下のわかちも侍りけるや女官
さハ父の官よりも侍る事なるべし　さらにまた
其の後もとりつぎ摂家の兼流閑院の二流をさし
むすめの女房とつかはれ上らうとも侍るなり　清華ハ常盤
井殿三條殿ハ元は名家の女もつかへけるなり　又弘
安（阿本）なとより上らうの行けりけれバ二條
大納言中納言の平家の女も侍りけるなり　侍従と
いふハ右衛門督右近衛将なと此家などのならひ

いふハ禁色とて赤色青色の御衣をゆるして侍る也
もとハ法皇よりさぶらひなり大臣の女也女房ハ孫ともまて待つる
御やうして禁中にハ小路名と申也　押て大納言の局
と申侍る摂家なれバ藤大納言源家なれバ源大納言
なとゝやうし侍るなり（小路名上ハ綾小路錦小路などの類也）

簾中　簾内

大臣の孫ハ数（数たべし）二三位宰相などの息女にて定め
ろゝ禁中の職掌並の帯類并蔵人ハ宰相などの息女の女
事なへるとも侍る明り中の方文（ワカ）白緑なるなり

女房志下

小上臈
故二位殿三位殿及び宰相なりける人のむすめあれこれまで

これは四位して一つ下に侍も給ひしるべく小上臈と
いはれ侍りさてこの侍るは撰ばれるひとしき臈の
中りと代者せし御くとのこゝろへくいふ名のむすめ
一 小上臈との御侍もとも公家のむすめなるべし
諸大夫のこゝの源氏と申し侍るなり

日野勧修寺両流ヲ諸大夫ト云リ
近垣ハ御垣近キ義ニテ廿二社ヲ近垣ノ社ト云リ

中臈

諸大夫より儒門醫陰の二道を始の社家者流の女
なるとは以御すりたれ近垣の社の女房げにも多く
中臈のほかに命婦などにも入るなるべし

拾勅会釈
拾ハ王ナリ也勅ハ禁也奉命ヲ而制ヲ禁ル
非常ノ儀也

下臈

そは中臈よりはいさゝかおとれるにや又諸大夫拾勅
の侍下北面常日官の女或は賀茂日吉の社氏の女なともまじ
はなり以ても出仕と侍るの賞玄の女下臈
まかりつかふまつりし中臈より下は樹のかくし御局

かりそは六位の諸大夫以下日吉らへく諸社諸社の氏人
の女なりしかと侍るなるまれかとも殊に古時の女官
左右の兵衛などの女猶りけるさるの女なとも侍名よ
掬と侍るは若宮の事人々み宮宰相小中納言納言小弁
大弁左弁と諸の房などは若宮の事ともて侍るいづれ
く文人参りの官を召しも侍るなり又ひ名として人の局名
とらもり東向小衛門などいふ事一向下ざまの女嬬の名也
臈は代衣と名せられて小袖しきねの粧すゝ禮も
まへと始めたしくは下の所役をつかまつりて掃除
庭燎なとのきそと申る事也　そはりならひなき下国諸位の
末流諸社の氏人来人の女なとしまひけるかりそ氏　非蔵人
なつもとし侍る女嬬相具してひさきまかりつかりしかは其つら
らそのつきさくらやつくゝ乃むしつまむ神さしかとを
あくもりつる下ひまちをいつる事なるべし女房の志しなく

かゞみ水の色にもぞ見れどもありしあまつみ代
いはひしのあまのぬきさびしきためしみち子
なほきよしらへおもほゆもものもはたゝにはれかけても
ちよろづのためしをや

右本書於古之支字有數返心易難解候也
延永十六年五月令寫之　松田豊識
宝暦十三年神無月十二日寫之　千秋康九
偶手此本写しうつしや　元文三年戊午之原本
山居志女宮姫求武家來本写也　一巻之
于時元文三年戊午春二月廿三日寫之　中村南道

一　國郡卜定
○元文三午年十一月大嘗會之年
○八月下旬也上古者宮にて國郡定候後近江丹波悠紀主基相極ル

一　由奉幣
神宮　石清水　賀茂下上
○七社　大嘗會前　勅使立

一　御禊
○十月上旬御河ニ祓ノコト也

一　大嘗會
○十一月十九日卯ノ日ニ始大嘗會ト申者（十一月中ノ卯日定日也　辰巳午ノ日ニ節會）
天子御一代ニ一度之大御事ニ而悠紀主基兩殿ニ
其外新嘗之祭ハ毎年也悠紀主基之二殿ヲ卯ニ
くらゐにつきて後十一月之卯日ニ毎年ハ給
神代之御事ニ而松の丸木ニ萱葺瓦のまゝさ

ここに[illegible]十一月[illegible]

天子[illegible]御[illegible]

[illegible]

左大臣[illegible]

[illegible]太宰[illegible]

天子[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]大幕[illegible]

[illegible]大夜[illegible]

天子[illegible]

修坊　[illegible]天下[illegible]長久國[illegible]

[illegible]屏風[illegible]

[illegible]屏風[illegible]

[illegible]

[illegible]

風ニ御歌也[illegible]中ニ　[illegible]

○大嘗会悠紀方御屏風和哥

近江国

見加美山乃度可尓伊都留阿佐比加介久毛利奈幾与乃　[illegible]

波留曽見江良志

ひさかたの[illegible]子日の山[illegible]の露[illegible]

さ[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

すむ月[illegible]代のかゝみの山や[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]の里の秋や[illegible]衣[illegible]

[illegible]

天[illegible]

世[illegible]

[illegible]

[illegible]

○大嘗会主基方御屏風和哥

[illegible]

波留加尓毛安佐川万乃[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

浅沼の末にとゞまれはむすびしかは[illegible]くさくひの山

花もかれの本すひしまつくけくるゝ最守この森

年くにはすしも代りそくまつこやも山神のまつり

まつり御あら人ふ房のうちを行はれ村のさかへやまらす[illegible]

家くれにうひの神にむけて白にもえにはれてゝは星を守る

ましき千年に行はしに作に小川のまつの下にして

萬よ有る仍代にもしめの松ありひ民もあつしかたよそおせ

浅沢をする流てまも月見にたゝやのむしいちゝにし松も生く

ひけなの杉にもそろひまりもわまそとせの秋の田に人

植宝く千年まもなるともお[illegible]しかるに見とて

しらまし白見御歳がすれてむかしてこのみのみすき

きうら代のあけ東をつをよす風土海さの村に人きさ

うここしおきうらゝ山の月ゝけおもふのくさしかゝるところ　たくか

御の悲つれまる意の後まて　去めぐきそふは寿しも　御まめ

限よるとことつや浅しも仕付の宮代をまくわひ人の歌

右三十六首古形字を尽出其中に拝而読果以後に一

首とを写称ふもんの形小書し細法目以

一 大嘗会寿永元年十一月中ノ卯日定例とす

一 ねんゆうやく敷　りしか　煙包敷御湯殿以前に用ゐるなり

一 ゑんこう　筵　是古了常

一 ふたん　布單

一 こゝろさの　御衣　是古了常

一 目くけのろう　羅　と云字代り也混字と云

○神代　弐字共つくはしまるとよ御代を云ふなり

一 國郡卜定之事

○卜定とこゝまら國を定める悠紀主基を

丹波備中近江　主基　とこし悠紀近江帝に

しん主且をくとよ　取きんトきとにはせねなり

一 御屏風之和歌

詠者ハ儒林の人を以て詠進す 式部兼任の例なる日野

一流ハ名非成業之人ハ詠せしむる 此作の例也

勘解由次官淳信孝家等より 御屏風色紙形ハ

成淸朝臣の子孫相傳して書進す

一 悠紀主基之節會

○大嘗會翌廿日辰ノ日ニ有之 巳午日ニも悠紀主基之節會あり

次日ハ

一 豊明節會

○豊明節會ハ清暑堂ニて二百年斗ハ中絶也

豊明節會之名節會ハ總名也 則ニ豊明と云事なく

云也 成書ニ天武天皇朝廷ニ内宴ニ於テ公卿百官

讌群臣（ムツキ）ニ天皇宴而云ふる 顔（モシキ）赤淸師（トヨ）ニ於て

とよのあかりハ中めでや面の赤くなるを云也

れもなうしんと饗以下公卿ニ至る迄宴

ゆゑは朝賀ある元日の節ハ正月元日の宴會

されハ辭する也と云しけり 仍而群臣に賜ふ日

其後ハ宴の字代深く是則節會詔

正月七日ハ元日の節會同く七日ハ白馬の節會同

十六日ハ踏歌の節會なり是ハ三節會と云節會

也 此外ニ節會の宣命紫宸同

ありし七より豊明ハやむことなき節會にて此節會ハわきて

けさよりのつとめ武ハ共ニ書紀元日の

宴の沙汰の儀ニ依る也と云ひしとかやれハ

雅楽寮奏類聚日本紀ニも宮門ニ須沢て

むかしけれハ名しこん

一 新嘗會

○大嘗會濟翌年より毎年新嘗會十一月中卯日也

眠目抄　跋

夫俳諧ハ世におこなはるゝよしもてあそふ也
一切の事ハともに所通にあひてまかふまむかし
くるはしきいふうちのみよるとなしひくかたなし
られ中ることといふいふことたけまち
まさてハ人の教ハよしもんの教をうけるよし
ぬのるといふものなし
ことなき人されハ文法結句といふ
からこともその心をつれ所通風体と得られも
才子文に風体といふことかしこまれわかしるし
ことさらされあるもかしこハ心をもいへとも
あききわとこれわれ　堅も人に教まちかし

元文丙辰初冬写之畢　三巴

此書ハ元文年中三巴子より大掌舎にてハ安毅モノ指之事（之年或人讀り）
平しゆ在庵[illegible]

文政二年卯の五月朔日写之

中村萬喜道

されハ哥と申侍るハ心よりいたす事也されハ
とゑしゆして まふかきさんをとよまんとハいふかひなく
世の心をとんとよむ事也其一の物なれ也色とん[illegible]
思ひつゝけ心とうち案して ま心をとらさんとせ
るんらハ我れハれ心にまかせ天人とともにしらむかし
御野河海とも思ひのこしせんなく流行[illegible]
まへて哥やまく かすかにかし 堪能の人もさらひ
こしに[illegible]にあつんさしもなりん人とよきこと 哥ハ
むも世俗それハよおもと 心の徘さしく上手のもの
まなかしうれいうりうる也心とよく心からこと
さ此の[illegible]也 二の[illegible]を此心をん人ハあさくらへ[illegible]
つし哥ハいつもるん人とゝ心かうとなりますいつハふまえし

こゝろへハはあきらかにこれハあさからんにたかし哥
をよまんと思ハくハ此なをふかくすへし たゝせん古今集
万葉集よりうつりて 三代集をよみ人御はしめさ
古歌よりて心をうかへ[illegible]いそかなと
たとひかくわかさ詞なかし たつけ[illegible]哥よみハ
あまたの万葉の詞をよんなる いふよそこらくいつへんとも
つくりなかしもならいて 人のそのそかなくおもハ
心にへ哥を詞にして詞よも今さ[illegible]かしらのさか

一 小町かうた[illegible]さきあそうしつ世ならへとさてあし
のさまゆきか

はかなしと枕さためしきましねこそつむし
人をこひぬるのなみさかりけり

かへし小町

おろかなる涙そ袖に玉はなす
われはせきあへすたきつせなれは

一 哥の心ハ清行か女によりゆき
はらくの涙のまさるをみる河
袖にしめとてあふれもなし
こゝろやれはさへし　業平女よりかへりて
あさみこそ袖はひつらめなみた河
身さへなかるときかはたのまん

一 秋津洲ハ秋津の風俗なれハ御門さまの宮を初め
たてまつり海士しつのをしつのめにいたるま
てもあはれをしるのりて来あつめんや志れハ天

斉明天皇世にみゆきありて筑前国上座郡
朝倉と云所の山中にくろ木の御所を造てまし
まし是を木の丸殿と云まうさして御ゆかし也大
嘗会の時くろ木屋とてつくるも席当不造ハ
その時の例也民を労らさらむ為まても倹約なるへき
と云しるし居所の宮はつちはしとりちらひも
の所をさらさりたる也その木の丸殿と
用心深し御出入ある時は入る人はすくれ名のりを
し給ふとなんよませ給ひけり
あさくらや木のまろとのに我をれは
なのりをしつゝゆくハたか子そ
天智天皇のおほ御心ハ民とともにあそてうらひ

ろめくりたるもろまもと国々の風俗によりてひさしく
ら出来たる所延喜帝のころより奇しきまくらつくれりまた
うちひらつくれりとも見えけれど両もその御河くだりて遠
花鳥をそのさまくうつりてかのそてきし御書に大
形の絵なりし随道のあてたさに世にハ読の絵を写て
絵にいたるまで人文字の君しるものハつき
おぼえ地もとも嫁にハ文字山ハちりさきつらくれとも
出られける人は何さまとすれ海ハ川そさかれ
いろいろはせの人よりうき事となれとて又時々の
今はそ絵ね事くらりとされくれハ先にも上に海
出るとも見るともいつも用あんもせ文人くにハ抱と嫁よ
まつあれハそのあるかくしもやまりとそあるかくしく

大人ハ和きしき嫁にハしらてみさらう読にハいれハ
よそあやまりて賞とも恐へきくれハとてみ
うらやみて利ともいひてあらぬくひらしき
かくことわりといふかまへ
一 又人ハ一段のつきあれハとそねきつゝとをみることよ
くわりんたうりあらへ騏驎と云かいふはそう抱も
をあつてゝ一躋躋歎のあやまりなきをあらはし人
とてもいゝそこゝもいりとされせん紙れハ文よいふ
まく遍とゆるして従ひを見てゝよ其よりあ
まさ話よ方にすさしらうちらくかうて後
とくりも男の用ひとうまくてとうきもきそう
の様とのう出絵とにかくえりそく〳〵まて絵ハ絵

人銘にめり給ふ悉に此物あそはれ給淸涼殿のくゐなをし
きれ長のさゝまとやすらかなれはしもとなゆき也れ
不息の書なさしに（割）書のうさりぬ行く給ふ婦くか
らん半れとて御かし諸きしにもありけるかえて
むかしも見給ハ前の光覚にもありける作もふ公作に法得り
一 大さき何事にも名とゝかくハひ一夜の礼めあ
もえ人の名ひゆんなるへしその頭に評とよくえをに
作りけし名をさりけれはあやらう給ふれまあそえやと
ちかへんそその人より志りに教あれも説をくもん
如也 人操も切さまりて文辭もおよてきし 人すゝとひ
神〳〵はれぬまとハおくの大あれ俳せとも人〳〵もちかく〳〵れ
却の〳〵ひゆかさる〳〵也 大貮身ハ〳〵の時ハ女儀あや〳〵い

一 元ハ不思議の作なる〳〵 詩哥の作〳〵とも見ゆる也下し
披恩賜花雲水深高智清暁霞蹊秋 此詩ハ
頌智なる〳〵し 雅楽頭なる人〳〵かられける句〳〵いそに
清少納言元輔の朝臣の集に捲り〳〵れかけり 天徳四
年内裏の哥合に
あふまてとせめて命のおしけれハ
恋こそ人のいのちなりけれ
此歌は〳〵 二あれとも作も〳〵〳〵して勝に〳〵れけり 詞の
病なる〳〵 〳〵哥あらすくかうかれ〳〵とあるさうあや人
のあつさはとこれかまて〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵也 又その姫
るまひ〳〵 〳〵ふかなるへし
貞子宮仕ハ一条院の御時也 中関白道隆の御むすめ也

ほ経ちけるやうかりくらうしせ給ひけるは
しゝのにちまかしことゝ忘れはべ
急んなみくの名をゆらし（寿）
とかさそみきちやうのひりたむすひつきせ給
りかへとうき給てのち院は絶しつきらりなは
仏の中にもそ思ひさくおかしきせ給けめしと見えける
そうし

一 ある殿上人ら八月のなかばあまりの比くらうけるは
殿んとうきたなまりけるにみ（みれうくる）
うへよりのとのあまきしけまいさゆけなくひ
きらくれなのちきりうれ竹つなの遣れは河ら松
くすさくとみてさ給さらるる女房ゆしりは
さらやあつかたらんやうまてそみ女まとてさくらりれ
なり人ゆふなり急まそ蛍火乱れとうらなりえさ
ちにみつきそて夕霧蛍乱と母すさむまりにららさ
今く殿人（ねか）は夜もりのとられやらにほうりこちうち
りうこうくまやさしく物りうてこのとこ何とふ

一 ある人んほいふくて物つなさとさいてしさ
つされへさらにららうら女房ものかそうし宮を
都のなけりよるそつやくさまるれたなりなし給
めさのかとをあまりみみなく殿しおかしりうく
浦ひりのなくもしありもおもひおとろかし
さりけりこまもそみいまてらかとゝくかとたゆ
うしき海なりすくてこの人ともころくしまやさ

しくちあ里けるころなれ
ことゝもせくみさらにけりゆかほとゝきすこそ
あくもしようもあられなりけ也
といふ也此作者ハ天暦の御時なしつほの五
人成か中ま清原元輔のむすめにて清少納言と
いふもの也一条院の后清涼殿にてつかへしきさき
或頃ハしひく赤染衛門伊勢大輔紫式部馬内
侍なとしすゝめらへく也此ころかくしよんいつら局や
さしくこそ何れ同し院の御時宰相と申つほ
りとりけるとみをとくわきも紫式部流しけつ
みかつからやのみ拵いすさんとおほせかれけ給ハ
此清少納言まあつひけるかなはすくてみ
きとまれあやまりけり今の世まてもいしきたと
いはひつくられ侍り香爐峯乃ハ唐白樂天
か後まの山のかよしに一の草室をしめてすこし
れ其村の詩まて遺愛寺の鐘ハ枕をそはたてきく
香爐峯の雪ハ簾をかゝけてみるとあるとみる
紙をさ給ゝにはりてことをハ?めてるものやさし
かりけるまといへくいろ様のものにゆるしたまゆ
まかひつゝしき事中にもとわりなりけり

一 大中臣能宣 文殊菩薩かやうてのすさめそこ
の人にて武蔵歌具乃弟子目にはつしき哥つかま
まつりて作し々文殊菩薩いつれにも侍りてそ
たしなまて名義也松とこそつゝかたへ

天にのほりてまかりけるをみへん
世にしもやよらん都良香よく詠てき
いくはる枕とよりて能宣とうちて云々さるか
に帰旅ともゆりて言ふあけ名月あらくいつ有
かともてよむ人さえやわさらひのふる義人〈公〉
これやと秀哥とえやわか山家の名月よむやう
やあかりてそくもちはれ能宣まけてけり
何しもこそまして田家行のなさとく格歌にも
さてもこのわかのこともあまりやあらん又それ
にくよ作者すれはとてまうくるの哥ととけられ
ひとつなるとかや康義のひとつの本にもある
人こ遍照寺にて月見侍るに山家秋月と云ることを
よみ侍りけるの中に藤長卿しうちの歌にも殊よの
香まそ何くさりけるとうまとうちやさしく覚ゆ
らんとおほせ下されてまうしけるとおそくの
山人となりて山家秋月といふことをよみ侍りける
　ふる人となれる山里のあさき秋は
　月の日のもとをさひしかりけり
件の歌は草案左と中納言とりて云々右
家してこりねられけりけり小山の古今と云れ
ことにやまりけるは新撰の奥を姉らく歳咲て
　草案のくさ　花の雅人〈公〉和前将と件と
うきつくりろつるを花れあまりの歳まて
まことての草案とこひらまそ錦の袋にへて家

拗してくはしうきそのちかくうちたこれなきそなり
ひれひひあるとおもふ人の事とかくしるさ
まあらんのすへきをなからしく能々せひたる
うふへし

此目撰抄は大宮右大臣俊家卿の作其後代々
伝る所也あまたあらく一見してうくはえ
しるぬ　文政四年の秋　九月十六日　中村直衛

徹書記物語　抜書

一　為相は為家の後の子也為家の跡へわたし
為世は為家の流にて嫡なり為氏も正統なり
為家の流冷泉と二条家のは何れと申すや

一　冷泉流の風体は枯木のやうなるはくしくし
なしかし筆とはくろうひあそびしれば人のな
らふへき道の事にあらすとなり也

一　撰行は三十二家の歌とも云明は採もし
為明は返納あへて集中に没しありけるよ
新篇は定篇をまとめ撰捨し侍しおかしく記也
あるへきなり

一　内裏にて和歌の会に寄衣恋　ちきり深くとよろし

和よの年と成ばむかしや中の衣なりけん

一 山名大蔵大輔宗全よく月輪殿と参会し侍しよ

忍相恋　ちぎれども我が身の思ひのかなはれば入り

末も氣なすしあやしくもなん侍し

一 或家の康脈会ちよ為事に契旅恋　う宗てさき

御松が孫のあさぢは我身もまくる秋のうら風と

よみん侍しを一座衆の中侍しを我一人以ひ

そうして勝のよし申き　下黒

一 暮山雪　ひとり〇雲でも色と移ともあと

あさの峯の枝　子孫歌の中にはおもてうちよき

仰しくなりし

一 暁蛬　露の草も秋ぞやわりなきとこの本木の

霧の身を人ぬきくもふむ人かくれなほかくさとよ

つきしや

一 祈恋　ゆふしでて我かむすびね露ぞちりしぞ祈

ぎしこの末の秋風　為家のうたに　数ならぬ

此程は神もうけずや恃む人のまつ祈らん

一 古今の歌も心こそあれ古き姿はあるらしくて

当世のうたまんあわざるなり　古今のうたなれハとて

みなおなじりてよむつましくあらず　業平　伊勢　小町

躬恒　貫之　西昭なとのうたをとるべきなり　古今

もまねてよまむよ　歌二百首十首こそはとくべつるべし

一 秋夕　うしと見てそなほもいとはれし我身世にあらん

頃の秋の夕暮

一寂寞ハ秋夕　一ことよりつまぐさ男のうきわかれ
まもあらぬ秋の夕暮とよめり寂寞ハ此外眉目
よろしくよそうしたる内裏よく女房のありしに
手をとらへてむかひくちびるひらけれハ女の腰
ことぬしのうれますやしといひけれハおとこの手をと
されハこそ秋といふぎれうつりきの袖も秋男も同し
んよとよめり
一蓑種　みそぎくおもひこそあきのうちよめぐりきて我よ
つらけきよ秋やとゆらん
一夕顔　うきおもひのつゆのはなより深のさとねし
さけるゆふかほのむ
おこハこつふんともゆしんとうちやくのこし深ふかる
此言玉葉集ニ月のうさしやなかりはたまよありしろく
作り
一傾城女　旅なりんなうさのゆく恋もえし秋の
夢も猶さらめん
一為秀　あはれなる友しもかくも此世なりけりひとり
雨ふく秋の秘けり
一山深雪　時雨まてくもりて雨ならしほるし山の雪よ
たくなきましき木くの下おもし　葉皇ふく　在も木も
うつれけるつる雪とこや行く山おくしは深けり
一定家卿よ　玉しねつきなき袖みて見かけて
我こぞてハうしやともけり
一霜夜を先がけ常ある夜の仲なり今の月初夜ハ續

古今集抜書之

一 春霞ふよ　人にてよ付くるハきらし　桜也よき
山ハ月故ふりたると
一 なき家のなさけハろくしなるなさけなり
一 さりなりそくハさなりそと云心なり
一 秋の色　夕ぐれよみなきさ人のうら水くざらぬ
床とるやなるらん
一 毎月百首の内ハ定家の歌くるの右府のつるく也せ
ちもし抄なり実朝なり心やさしやさしくと
引しなる一とし一とみすきその内ハ立退すてハあるなり
ようゞ歌しく草引ハいつやうすかり家なと深く
あふうハんな御家の作よく相違してハうつさもいと
なりこれとハ毎月抄（ーと）百首古風之ちらしく作
さしあはさつく人と右府のつくへ（かきれし）
一 去風　名ゆ梅を昔の木も衣せ之くぬれの人の心の
されの初凡
一 去定　夕ぐれつれつれとしてし西鶴のうちもぞ
かくこれを何の月
一 菜師ある元府入んとよ　宵毎のふるの中にたる
人や川とるなうつれるうらん　新後拾
一 花ハさりよ月ハくまなきをのミ見る物かハと兼好
あるやうなるかん（ハ詠をもちくうるのハ世をかよく
一人なしでかうきうらり心ハせ給うてき）久（我ら
法大寺らの詠ちまへまてあかしなり　宗祇まて有

これハ内裏のとの井よかゝりて御ま祢と申しま
てかつりけるとそ　後宇多院崩御ありしよりて
遺恨しけるとそ　やさしき哥人の骨折なり追分の
哥仙よく頓阿慶運浄弁兼好とて云ふ四
天王とてあかめしなり　つれ〳〵草ハ清少納言が
枕草子になぞらへたり

一 うたさくらハ一重さくらなり

一 あかおもきらんハまろかさざと云なり

一 寄風恋　うれなしぬ人の心のあらしにせうなる
まごころ秋のけしさ

一 待恋に　風あらし紙もしあらしの小萩袖によそて立行
月よおかりまちし雲路

一 忘恋　うれしのしらぬ心の誠もなく秋とまちまれよ
君ならしとし

一 定家卿　忘れめやさハ忘れ行秋ハ露よまかせよとそ
いひてまうれし

一 為氏　人とわくこそつらやいまん今かつしめうまむ入江の
春の明ぼの　楼紅とい小路て　山人の衣のゆき
の紅もなし　秋の宿は霧のまよおつき橋

一 山家雪　くる雪のあふ坂なるしき志ら川の関の戸
あくる山の宿

一 祈恋　あさく南の契りやあさくて作祢とらして
こときゝとしとせ

一 名所雪暁　時よなりあし南しらハ初雪の宿ならさか

うちむしが於山本

一暁筵　暁の祢ざめハ老の常まして宵のまどろむ事
も祢かたき

一おもされかりし比七月星に手向るく一葉のうさと
よみて木葉に書付侍りしかうこのよとしめ
なりさかりとこは星の使もといひて去年の秋まで七夕
七夕まつりさて星に手向侍りしなり雨ふりさはりとゞまりし
なりけるさ比るこゝちのらいかとあけのべ晴の言へ
出てよろこびいひ侍りしなり男が歌ハ東洞院にありし
なりそのひゞきは東坊の江戸と云ふりその江は
月次ありて冷泉為季為邦卿探韻方後其外
会習の人々ども女人もまりまねあかりしなり思給泥の
伴宿のあかしがうさがよみんさくハな江戸がこゝろへつ
きてゆき侍らんと申さましかども其こ歌をし
うさありしむ歌まてなづかりしかとも伴宿
まつきられて江戸が庭へゆき侍りしかハ八十余の
古人の志がおがさなすかが出会て申侍しハ見の
江ろさあそがまことハ今の脇かさもまなきらず
なり禅蔵が若きおりの脇かなどころさへうのさ
ちハらけなきまりしがやさしきゆゑまさつぬ
は出きみつひてあろがしきふへ歌ハさのましくまて
さふらふと云て諷ようきてくれ侍りける　源秋
宗月　一鷹別古書窓　三ヶ四文字歌までありしなり
これハ八月初つかたの事なり　江戸よ女が旨よ云へ

すゝみ出しかハ一方の流すハ冷泉為尹為邦今一
方の流ちよ家探題を以よ先祖の人々に逢探題
が一族三十余人歴々として在りけるに（ある
がしらハ撰者清きらくれども升合まで有りし
か）庭に（清き作し探題にも付て千余の人々
すてをみのこさずしおろそ并に常のふさたるべき
とて在りひし）　深秋寒月　清よ文り
家の新すれやひかりなかむる秋のよの月
一首のうちハ　山のはよ一はゝ有たるつゆりの名
をやかん上とさばかりけれ仰けり　京も聞えたるなり
かれらハひさしう出よ出まてきて余とゝまらんとすれハ
しなりろの御十四五歳よてありしなり

ろのうちなるの御跡よ甚云つ尓つり仰りし上御
むろ山の禅寺御後よ上意ありく仰せしおしして
甚ムまひまかりしかとよ志ろしく又さま毎ずり
ありを清親よさくれ仰りしうう御さししいで
うさとよみ仰りしすり　徐戸が今の東すりさかの
詠草三千十六帖ありしすり三万首ほとあるべき歌
ろ迄とこそ今熟卿よく届き仰しなすりとぞやら
よるをいつけまでの詠草二万首よちとしなりねの
なすり

右の本ぬきをさいつ比徴古記抄をかりてうつしてよみしとれ
反古に出侍るむしと今又かき侍りしかれハあやまり
もさこそ多くあらめ見ん人よしやあしやをしるへに

文政八乙酉年七月廿六日　中村直道

哥
此頃ハやみよまよひさされて四十日あまりく
月細りなくくところん絵くくあまりさやく
うつしおけハ出ともろともゝちなくかしなつき
めかこつまてもろか中のものゝすり